

北広島町立芸北小学校

(<http://www.khiro.jp/geihoku-es/>)

校長：國本美幸

所在地：山県郡北広島町川小田 213-3

連絡先：☎ 0826-35-0415

— 6年間を見通した体験活動の計画 —
— 自分の内面を顧みて成長につなげる —

1 集団宿泊活動の概要

(1) 期間：令和元年9月24日（火）～27日（金）

(2) 場所：自校及び北広島町内民泊

(3) 人数：芸北小学校 11名，八重小学校 23名，壬生小学校 26名（計 60名）

(4) 目標：○町内の自然を生かした体験活動や民泊等の地域の方とのふれあいを通して、ふるさとの良さを実感する。
○町内の同学年児童による自然の中での体験活動を通して、課題を解決する力や協働する力を養うとともに、町内児童間の親睦を図る。

(5) 日程：

	1日目	2日目	3日目	4日目
午前		●朝食づくり	●ウォークラリー ・カキツバタの里 ・牧野富太郎句碑 ・霧ヶ谷湿原	●川魚調理体験
午後	●オリエンテーション ●草取り ●夕食づくり	●児童交流会 ●人間関係作り ●民泊家庭対面式	●ウォークラリー ・高原の自然館	●閉会式 ●お別れの会
夜	●学校紹介練習	●田舎暮らし体験	●田舎暮らし体験	



2 集団宿泊活動の特色

(1) 6年間を見通した計画的な体験活動

北広島町立芸北小学校は、児童の発達の段階に合わせて、宿泊を伴う体験活動を6年間の中で段階的に位置付けて実施しています。高学年で宿泊を伴う体験活動を実施する学校が多く、低学年からそれを行っている学校はとても少ないのが現状ですが、芸北小学校では教育的な意義や効果を長期的視点で捉え、体験の内容を工夫して、各学年で次のような宿泊活動に取り組んでいます。

学年	場所	期間・形式	概要
1・2学年	自校	1泊2日 自校の児童のみ	親元を離れて初めて学校で宿泊する体験活動
3・4学年	自校	1泊2日 自校の児童のみ	自分たちで火をおこし、その火を使って夕食を作る体験活動
5学年	自校及び 北広島町内	3泊4日（民泊あり） 他校の児童と合同	学校泊と民泊を組み合わせて、他校の児童と協働して様々なプログラムに挑戦したり民泊で地域の人々と交流したりする体験活動
6学年	関西方面	1泊2日 他校の児童と合同	他校の児童と合同で実施する修学旅行

お泊り学校（1・2学年）

1・2年生は、2年生がリーダーになり、みんなで協力して活動できるようになることを目標としました。夕食は、お手伝いに来てくださった保護者の方々に見守られながら、畑で作った野菜を使ったカレーライスをつくりました。寝るときは段ボールで作った寝床で気持ちよく寝ました。夜はさみしくなった児童もいましたが、事前に考えていたさみしさを乗り越える作戦を実行して、過ごすことができました。

火おこし合宿（3・4学年）

3・4年生は、山で集めてきた薪を使って、各自が自分の窯で火をおこして夕食をつくりました。1回の調理で一人に与えられたマッチはわずか5本。これまで2回取り組んできた火おこしでの活動の失敗を生かして新たな作戦を立てたり、ゲストティーチャーのアドバイスを参考にしたりして、全員が上手に火をおこすことができました。この火おこし合宿を通して、3・4年生は課題を解決する力を高めたり、協働して活動する力を身に付けたりして、たくましさを増した3・4年生になりました。

民泊体験活動（5学年）

5年生は、八重小学校と壬生小学校の5年生と合同で3泊4日の集団宿泊活動を行いました。1泊目はそれぞれ自分たちの学校に宿泊して、防災に関する体験活動を行いました。芸北小学校は、「なんらかのトラブルで学校の電気・ガス・水道が全部止まってしまった」という状況を設定し、暗闇の中での夕食づくりに挑戦しました。2泊目からは民泊体験をしながら、いろいろなプログラムに他校の児童と合同で取り組みました。各自が自分の「さまたげ」を見つけながら、それを乗り越えるための方法を考えて、4日間を無事に終えることができました。

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」（以下、解説という。）では、発達的な特質を踏まえた指導が必要であることが示されています。

例えば、第1学年については、「幼児期の自己中心性がかなり残っており、学校の中の児童相互の関係は、個々の児童の集合の段階にある」ことや「感情的な言動等が多いこと」、「社会性に関するこの発達の差は大きいこと」などが挙げられています。第2学年については、「他人の立場を認めたり、理解したりしようとする態度や、よりよい学級生活を築こうとする自主性なども次第に高まっていく」ことや「学級全体に目を向けたり、人間関係を少しずつ広げていったりするようになる」ことが挙げられています。これらの発達的な特質を踏まえたとき、親元から離れるという目的の設定や2年生にリーダーの役割を当てるという役割分担はとても適切であると考えられます。

また、第4学年では、「集団の活動目標の達成に主体的に関わったり、協働的な活動に取り組んだりして、リーダー的な児童を中心に教師の力を借りなくても、ある程度の計画的な活動ができるようになる」ことから、「様々な集団活動や体験的な活動を通して、互いを尊重し、協力し合って学級の生活づくりに主体的に参画するようになる」とともに、日常生活や学習について、めあてや目標をもち、意欲的に取り組み、振り返り、改善するように指導することの大切さが示されています。これらの発達的な特質を踏まえたとき、3・4学年の目的が自分たちで火をおこして夕食をつくるという協働的な活動に設定されていることも適切であると考えられます。

さらに、第5学年では、「中学年までの経験を生かして、自分たちで決めた集団の活動目標をできるだけ大切に、常に実践活動を振り返り、改善しながらこれを達成しようとする感情や意識が強くなる」ことや「他者の長所や短所なども相対的に捉えられるようになる」とともに、目標を実現するために、互いに信頼し支え合って活動することを強く求めるようになること、また、「集団としての実践や自分の言動について振り返り、改善するなどしてよりよい生活を築こうとする意欲が高まっていく」などの発達的な特質が挙げられています。よって、5年生において4日間という一定期間にわたって、他校の児童と一緒に協働して課題の解決を図ったり、初対面の民泊家庭の人々とコミュニケーションを図ったりする体験活動を行うことは、発達的な特質を十分踏まえた適切な位置付けであると考えられます。

また、「解説」では別の箇所でも次のように示されています。

特別活動は、様々な構成の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動の総体である。その活動の範囲は学年・学校段階が上がるにつれて広がりをも
っていき、そこで育まれた資質・能力は、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で生かされていくこと
になる。(小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編 p6)

たとえ宿泊の場所や期間は同じでも、低学年と中学年によって異なる目的を設定したり、高学年では場所を変え、期間を延長し、協働・交流する対象を広げたりするなど、学年段階に応じて体験活動の内容を工夫しており、このことは上記の「解説」で記されている「広がり」にあたるのではないのでしょうか。



POINT

6年間という長期的視点に立ち、児童の発達の特質を十分踏まえて体験活動の内容を考えて計画的に実施することで、教育効果が一層高まり、学習指導要領の目標が高いレベルで実現できる。

(2) 「さまたげ」のもつ意味とは

平成29年告示の新しい学習指導要領では、特別活動において育成することを目指す資質・能力については、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえて特別活動の目標及び内容が整理されています。このことからわかるように、特別活動において自己実現を図る力を育てることは最も重要な目標の一つです。このことについて、「解説」では次のように示されています。

③ 「自己実現」

「自己実現」は、一般的には様々な意味で用いられるが、特別活動においては、集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点である。自己実現に必要な資質・能力は、自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方や生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれると考えられる。(小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編 p16)

芸北小学校は、平成25～28年度の4年間、北広島町立芸北中学校とともに文部科学省の研究開発学校として、小学校から中学校までの9年間に「挑戦科」という新設領域を設置し、「社会の中で自律して生きる力を育む」ための教育課程や系統的な指導方法について研究を行いました。

この「挑戦科」の基本的な考え方は、目指す自分の姿を設定し、その実現を阻害している要因を自分で分析し、新たな手立てを考えて実行し、目指す姿の実現を図る、というものです。ここ
で出てくる「実現を阻害している要因」を「さまたげ」と呼んでいるのです。この学習過程に働
いているのが「メタ認知」とよばれる作用です。研究開発学校としての指定は平成28年度で終了
していますが、芸北小学校ではこの研究の成果に基づき、現在もこの「挑戦科」の基本的な考え

方を生かして体験活動に取り組んでいます。5年生の集団宿泊活動で実際に設定された「さまたげ」に関連するプログラムを具体的に見てみます。

暗闇の中での夕食づくり

1泊目の学校泊は、ライフラインがすべて止まってしまったという状況を設定して、暗闇の中で夕食づくりを行いました。光の確保と水の確保と火おこしをどうするか考え、役割を分担することにしました。懐中電灯と飲み水は近所にもらいに行き、トイレの水は川へ汲みに行って、バケツリレーの要領でみんなで運びました。3・4年生の時の火おこし合宿での経験を生かしてなんとか火をおこすこともでき、無事にカレーライスをつくることができました。懐中電灯1台の光の中、みんなでカレーライスを食べました。予想していない出来事が突然起こった時に、一人一人がどう動くべきか、本気で考えました。



民泊体験と他校の児童との協働

2日目からは、八重小学校と壬生小学校の5年生と合同でプログラムを行いました。2日目の朝に対面式を行い、その後、すぐに人間関係づくりプログラムに入りました。異なる学校のメンバーで構成した約10人のグループを作りました。このグループで残りの3日間のプログラムをこなしていきます。初めて顔を合わせるメンバーで、とても話しかけにくいようでした。人間関係がぎくしゃくした場面もありました。また、2泊目からは民泊が始まりました。民泊家庭の方々と対面式の後、すぐにそれぞれの家に移動しました。初対面の方々の家に泊めてもらうので、どのようにコミュニケーションをとればよいか不安でした。年齢が離れている目上の人に、自分から話しかけることがなかなかできませんでしたが、民泊家庭の方々の方から積極的に声をかけていただいたので、安心できました。



「さまたげ」は、物理的な要因と心理的な要因に大別されますが、物理的な要因は働きかけることで取り除いたり、解決したりすることができやすいものです。しかし、心理的な要因は自覚しにくい面があります。目標や明確な課題が具体的に提示されていても、人間は「しんどいこと

はやりたくない」「先延ばししたい」「失敗したくない」「誰かに任せたい」などの葛藤や誘惑の気持ちを常にもっており、冷静に自分の気持ちの状態を見つめることで、それらの自分の「心の弱さ」が目標の達成や課題解決の大きな壁となっていることに気付くことになります。これは一般的には「内省」とよばれる心の働きです。この内省の効果を生かして、自らの心の弱さを自覚させていく場面を体験活動に複数取り入れ、児童の成長につなげています。



POINT

自分の成長を「さまたげ」ている要因を冷静に考える場面を設定することで、児童は自分の心の働きや状態を深く顧みるようになり（内省）、自分自身の心の弱い部分が成長の「さまたげ」の最大の要因となっていることに気付き、自ら行動を変容させようとする。

3 児童の感想

◆ 人間関係づくりの活動で ◆

ぼくは、人間関係づくりの時に、ものすごい「さまたげ」にあいました。芸北小学校の友達が一人もいないことが、一番の不安でした。でも、自分から話しかけないと新しい友達ができないので、新しい人間関係を築けるチャンスだと思いました。だから僕は勇気をもって話しかけに行きました。そのおかげで、「さまたげ」を乗り越えることができました。

◆ 副班長の役割を終えて ◆

ぼくは、活動班の副班長でした。班長さんを助けられればいいな、と思ってなりましたが、自分のことで精いっぱいになり、何も助けるようなことはできませんでした。自分でやろう。と決めたことを最後までやりきるために、まず、同じ班の人と積極的に関わるようにしました。そして、たくさんの友達を作ることができました。

◆ 暗闇の中での夕食作りで ◆

私は、電気・ガス・水道が止まった最初の日に「さまたげ」を感じました。この後、どうなってしまうのか、いろいろなことがいっぺんに怖くなってきて、頭が真っ白になってしまいました。でも、みんなで知恵を出し合い、協力して活動を続けることができました。カレーを食べているときは「やったあ、みんなで乗り越えた！」という気持ちでいっぱいでした。私は、この活動で創造する力が高まったと思います。

◆ 乗り越えられなかった「さまたげ」も ◆

私の「さまたげ」は「自分から友達に話しかけに行けない」というものでした。今話しかけたらじゃまにならないか、と思ってためらったり、はずかしい気持ちの方が強くて、どうしても自分から行動したりすることができませんでした。でも、この「さまたげ」を乗り越えるチャンスをもう見つけています。来年の修学旅行も他の小学校と一緒にいきます。また新しい人間関係をつくっていくことになります。その時こそ、自分からたくさん話しかけて友達になり、この「さまたげ」を乗り越えたいと思います。